

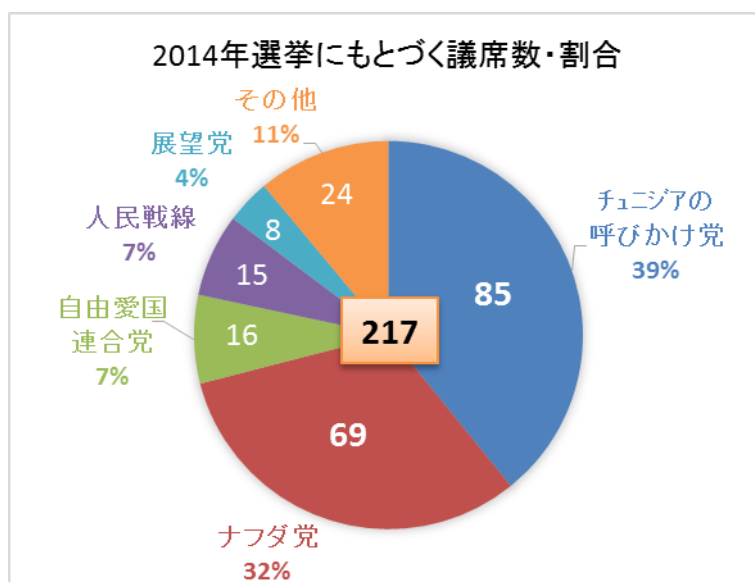


—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

チュニジア：人民議会選挙結果

10月30日、独立最高選挙機構（選挙管理委員会）は26日に行われた人民議会選挙の結果を発表した。各政党の議席数及び議席率は下記グラフの通り。これまで暫定立法府の役割を果たしてきた制憲議会は、人民議会の成立とともに機能を終了する。

三党連立「トロイカ」内閣を率いたナフダ党は第2党に転落し、世俗派のチュニジアの呼びかけ党（Nida' Tunis）が85議席を獲得して第1党となった。その他、自由愛国連合党（UPL、世俗派）、続いて人民戦線（世俗・左派）、チュニジア展望党（世俗派）などが議席を獲得した。ナフダ党と共に連立与党であった共和国会議党（GPR）とタカトル党は2011年の制憲議会選挙ではそれぞれ29議席・20議席を獲得していたが（その後離合集散を経て2014年10月までに各12議席に減少）、今次選挙ではわずかに4議席・1議席を獲得したに過ぎなかった。



（出典：選管発表をもとに作成）

*「その他」：人民運動、共和国会議党、民主潮流、愛の潮流、イニシアティブ党、タカトル党、民主連合、共和国党、農民の声党、社会主義民主運動など。

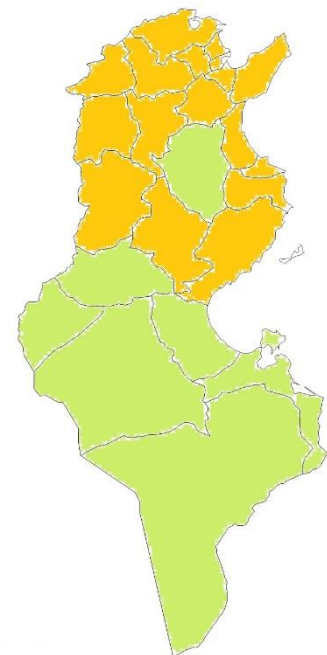
評価

今次選挙の結果は、2011年12月から2年間続いたナフダ党連立政権への批判と解釈できる。2011年10月の制憲議会選挙後、チュニジアでは第1党のナフダ党（イスラーム主義）と世俗派の共和国会議党、タカトル党による連立政権が成立した。しかしその後、サラフィー主義者が台頭し、治安は悪化し、経済は低迷したままで、国民は政府への不満を募らせていた。2013年には左派政治家が暗殺される事件が2回も発生し、この事件以降、イスラーム主義勢力とそ

の台頭に危機感を強めた世俗派との対立が深まり、連立の危機が続いた。選挙前の世論調査ではナフダ党への支持率が低下しており、これとは対照的に、チュニジアの呼びかけ党の支持率が上昇していた。ナフダ党は組織票を持つため第2党に留まったが、それでも以前の89議席から20議席も減らし、共和国会議党とタカトル党にいたっては4議席と1議席しか獲得できなかった。この結果からは、明らかに有権者による前政権への批判が読み取れる。

では、なぜチュニジアの呼びかけ党が勝利したのだろうか。同党は2012年、ブルギバ政権及びベン・アリー政権下で内相や外相を務めたバージー・カーイド・スィブスィーによって結成され、党员にはベン・アリー政権時代の要人、労組関係者、リベラル派などがいる。政治経験のある「強い」政治家が集まった政党、というイメージが有権者の支持を集めたと思われる。今後、11月末の大統領選挙後に組閣作業が開始される。ナフダ党を含め、ほぼすべての政党が挙国一致内閣を支持しているが、チュニジアの呼びかけ党はナフダ党と大連合を組むのか、他のリベラル派と組むのか注目される。後者となれば、反イスラーム主義連立の色合いが濃くなるだろう。

次期政権の重要な課題として、第一に、革命後の経済低迷からの脱出、失業や地域間格差といった社会経済問題への取り組みである。右図は、今次選挙における県別の最大得票党を示したものだが、北部と南部でチュニジアの呼びかけ党とナフダ党への支持が明確に分かれている。南部は失業率が高く所得も低い地域であり、そこがナフダ党の支持基盤になっている。次期政権がこの南北格差の解消に本格的に取り組めば、政治レベルでのイスラーム主義・世俗派対立の緩和にも繋がらうだろう。第二の課題は、イラク・シリアへのジハード戦闘員の「輸出」を止めることである。チュニジアは「アラブの春」を経験した国の中では比較的順調に民主化プロセスを進めてきた国である一方で、イラク・シリアの過激派組織における外国人戦闘員の中で最大の人数を占める（約3000人）。ベン・アリー体制崩壊後にサラフィー主義者の活動が「解禁」されたこと、また彼らのネットワークの存在、警察・軍の弱さなどが、チュニジアが最大の戦闘員「輸出国」である理由と考えられる。次期政権は、治安の安定化のために戦闘員のリクルート・ネットワークの根絶に本格的に取り組む必要がある。



チュニジアの呼びかけ党
ナフダ党

(出典: Institut National de la Statistique より作成)

(金谷研究員)

©本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799